

中西進
狂の精神史



狂の精神史

中西進

講談社

狂の精神史

定価——九八〇円

昭和五三年七月一四日第一刷発行

著者——中西進

© Susumu Nakanishi 1978 Printed in Japan

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三— 郵便番号二三 電話〇三—九四—二二 振替東京八一三三〇

印刷所——東洋印刷株式会社 製本所——株式会社堅省堂

0095-150844-2253(0)

落丁本・乱丁本はおとりかえします(半)

目次

狂と陽狂——六

不要の精神——二三

「をかし」——三九

性——五四

夢——七〇

詩の修羅——八七

乱世の狂——一〇四

物狂 — 一二一

死狂 — 一三八

風狂 — 一五四

癪かた — 一七一

戲作 — 一八八

乱離らんりの精神 — 二〇四

あとがき — 二二三

狂の精神史

一

明日香に「酒船石」と呼ばれる、一種の石造物がある。平板な石だが中央に大きく凹部がえぐられ、幾条かの溝がほられている。見方によっては、人形ひとがたにも見える。そう思つてじつと見てみると、何かそら恐ろしくなつて来たりする石である。

これを「酒船石」と称するのは、石が酒の醸造に用いられただろうと、人々が想像したからである。想像だから、真偽のほどはわからない。別に、菜種油を採取したものかという推測があるし、いつか人から、これと同じような石が南アメリカにあるという話を聞いた。石を通して東方に登る太陽を拝するのだという。なるほどこの石は東方に向けて据えられてい

る。

とにかく、明日香は正体のわからぬ石造物にみちている。一個の石を通して、太陽の輝きを拝みひれ伏す古代人の姿は、十分に謎めいていて古代的である。そう想像するのもよい。よいなら、本来の「酒船石」にもどって、醸造の、何かの役に使われた石と想像するのも、またよい。

古代に、酒がどのように作られたかを詳しく記した文献は、もちろんありはしない。しかし、『古事記』『日本書紀』に載せる歌謡に、次のような一首がある。両書、小異があるので、『古事記』によって掲げる。

この御酒は 我が御酒ならず
神酒の司 常世にいます
石立たす 少名御神の
神寿き 寿き狂ほし
豊寿き 寿き廻し
奉り来し 御酒ぞ 残さず飲せ ささ

要するに酒ほめ歌で、こういって酒を人に勧めるのだが、さてどうしてこの酒がりっぱなのかというと、少名御神（いわゆるスクナヒコナの神）という酒の司が、酒を讃（た）えては醸造して来たからだという。このお酒の神様は永遠の常世の国にいとされ、石像として祭られていたらしい。

そこで、「神寿き 寿き狂ほし 豊寿き 寿き廻し」というのによると、醸造の折、人々は酒船のまわりを歌いめぐり、舞をまっては踊り狂ったと見える。もう一首、右の歌謡に答えたものがあって、それは、

この御酒を 醸（か）みけむ人は

その鼓 臼（つみ）に立てて

歌ひつつ 醸（か）みけれかも

舞ひつつ 醸（か）みけれかも

この御酒の 御酒の

あやに転（うた）楽（だく）し ささ

とある。もつとはっきりと、鼓を鳴らし歌舞しつつ造ったろうことを示している。後世の杜^き氏の歌に、伝統の流れてゆくものであらう。

私は、あの酒船石のまわりに歌い舞い狂う古代人の集団を想像する。楽の音につれて神をたたえること自体が、すでに興奮的なことであるのに、そこにできてゆくものは、ふしぎな酒なるものであった。先の歌で「神酒」といっているのはそのことで、「くし」とは靈妙なものをいうことばである。「奇^くし」き酒のかもされるまで、彼らは狂い踊った。

この「寿き狂ほし」という「狂ほす」ということは、本来、「繰^くる」という語と同根であらう。手ぐり寄せる、糸をくる——、すべて丸くする運動が「くる」である。だから今の場合も、くるくると踊り舞ったと思われる。しかし、単に円状に動作したことだけを、この歌々がいつているとは思えない。まさに、ふしぎな陶酔と恍惚とに向かって、激しく舞踏は続けられたことであらう。そのような舞踏の結果に、一種の錯乱が人々を支配しなければ、神たる酒の醸造は、かなわぬことであつた。

二

酒を「寿き狂ほし」て釀^かんだということは、一つの「神懸り」の状態になることでもあった。古代において、まずは〈狂〉とは、そのように神に魅せられた状態だったと言える。

そこで、しばしば人間が神的なものとの対話を知覚する時に起こる、あの心情の不可思議を狂と考えてよいだろう。謡曲などには「女もの狂ひ」ということが現れるが、この「もの狂ひ」も、そうした状態の一つだ。「もの」は靈魂・鬼のこと、その畏怖すべき活動を、万物の上に考えたことばだからである。正体不明の「もの」、何にせよ一つのふしぎにとりつかれた狂が「もの狂ひ」であり、造酒は積極的にこれを神との交接として実修しようとした。

しかし、もう「もの狂ひ」ということばの中には、否定的なひびきがある。「もの」も神秘の靈格と恐怖の惡靈との両面から考えられ、「狂ひ」も正負の双方から眺められるのである。〈狂〉は畏怖と恐怖との間にわたって、人間とかがわって来た。

『魏志倭人伝』にいう、卑弥呼がよく鬼道に仕えたという記事については、古来論議がやかましい。しかしこれが、シャーマニズムか否かという定義づけは、今はどちらでもよいのであって、要は彼女が鬼（もの）に奉仕し、その支配し指示するものを論理として「まつり」を行なったということだ。するとこの記事は、彼女が司靈者であり、やがては靈格であったことを示しているよう。巫女とよばれる女集団のあり方も同じく、神と人との媒介者といって

もよからう。伊勢の斎宮にしても同様である。

天照大神を伊勢に祭るそもその初めは、大神を大和の笠縫邑かさぬいのむらに祭ったことにある。その時、同時に大和の国魂くにたまも一人の女王をして祭らせた。ところが女王は、「髪落ち、体瘦せて祭ること能はず」という。崇神天皇の時代のこととして伝える物語である。この女王の姿は、たまたま病気で祭祀が不可能だったなどというものではない。この様子は、まさしく「鬼道に仕へ」る様子で、それが肉体を極度に痛めるものだったことを語っている。神との交接の中にあり、「もの」を崇めた「もの狂ひ」の状態にあったのであって、動作としての「寿き狂は」すこともあったろう。女王の凄絶な神さびた姿は、鬼もとの對話に赴く姿である。しかし女王は、かくしてもなお、大和の地霊をなごめることができなかったという。

古代人は、こうした司霊の女を後々まで要請した。制度というものは、いかに形式化しようとも、形式だけでは存続しえない。あの、大津皇子事件という悲劇の中に悲歌の作り手として登場する伊勢の斎宮、大来皇女おきみも、狩の使として下向した「昔男」との間に、夢幻能さながらの一夜をもった斎宮の怡子やすこも、いってみれば「もの狂ひ」の伝統の中にある女性群であった。古代には、《狂》の中に、まだまだ神秘にかかわる心意が濃く存在していたと思える。

三

ところが、面白い記事が『懷風藻』の中にある。釈智藏しゃくちそうとは近江朝に中国へ派遣された留学僧で、持統天皇の時代に、三十年以上も経って帰国したとされる高僧だが、この人は在唐中に気がおかしくなり、行動に奇行が多かったという。いっしょに留学した仲間は気が違ったと思って軽蔑した。

右は『懷風藻』の伝記に書かれているのだが、実はこの「気が違った」と思ったというあたり、原文では「同伴、軽蔑して、以ちて鬼狂なりとして、遂に害をなさざりき」とある。「鬼狂」という、珍しいことばが登場するのである。

このことばを、故林古溪が「ものぐるひといふ日本語の漢文への直訳か」(『懷風藻新註』)といったのは、正しい見解であろう。鬼は、卑弥呼が鬼道に仕えたという、その鬼であり、日本語でいえば「もの」に当たる。少なくとも、この原文の筆者——残念ながら誰とも解らない。『懷風藻』の編者と同じ人物であろう——は、智藏の奇行を、きわめて伝統的に「もの狂ひ」として理解したのである。いや、一筆者だけの特殊な理解なら、文章は表現たりえない。広く、当時一般の理解がこうであつたと考えるべきだろう。先に〈狂〉の心意がなお

神秘にかかわっているといった。その一つの証拠である。

しかし、実は智蔵の奇行は、いつわりであった。伝記のその個所をもう少し詳しく引用してみよう（もと漢文）。

六七年の中、学業えいぎょう穎秀えいしゅうなり。同伴の僧等すこぶる忌害の心あり。法師これを察して驅を全うするの方すべを計り、遂に被髮、陽狂し、道路に奔蕩す。密ひそかに三蔵の要義を写し、盛るるに木筒を以ちてし、漆を著けて秘封し、負担して遊行ゆぎやうす。同伴、輕蔑して、以て鬼狂なりとして、遂に害をなさざりき。

彼は潜在中の六、七年間、同輩のそねみを買うほどに学業優秀だったという。智蔵は危険を感じて保全の策を案じ、髪を剃りもせずふり乱し、帽子もかぶらないで大道を走り廻って、狂のまねをした。一方、ひそかに仏教の經・律・論にわたる教義をきわめて、要諦を木筒の中に記し持っていた。もちろん密封して人から知られないようにしており、どこへ行くにも肌身から離さなかった。しかし仲間には本当に気が狂ったのだと思って輕蔑し、危害を加えることはなかった、という。

やがて一行は帰国、朝廷における試問では智蔵の論述する内容もことばもりっぱで、質問に対しても流れるように返答した。よって人々が驚嘆したという結論の出ていることはいうまでもない。僧正を拝命したとまで書いてある。

もう一つ、こんなことも書いてある。一行が船を上がると思い思いに持ち帰った經典を曝涼したが、智蔵ひとりは何も持ち帰っていないのだから、曝涼の仕様がな^{りよう}い。ところが彼は襟を開いて風を入れ、風に向かって「自分も經典の奥義を曝涼しよう」とうそぶく。そこで「衆、みな嗤笑して、以ちて妖言となす」。

この「妖言」も、先の「鬼狂」と一連の、仲間の判断ということになるが、これは『万葉集』に出て来る「逆言」「狂言」と同類の語だろう。それぞれ「およづれごと」「たはこと」とよまれている文字で、『万葉集』では死の知らせをさしている。不吉な死の告知は、人間が発しても人言ではない、それこそ人為の及ばない言語であった。「妖言」となるといっそうそうで、そもそも天地の開けはじめた、悪霊の跋扈する世界に立ちこめていたものは「妖氣」であった。

さてそこで、このように靈異の行動と映るものが、実は「陽狂」であったというのは、甚だ興味ぶかい。陽は伴と書くも同じ、いつわりのことである。『史記』（宗世家）には「箕子、